

川崎・光明山遍照寺

第2次世界大戦中、戦況の激化を受けた政府の「金属類回収令」に応じて川崎市川崎区の光明山遍照寺が供出した半鐘が8日、戦後75年の年月を経て寺に里帰りした。昨夏に静岡県内で発見され、消えていた表面の文字を市教育委員会が解読、同寺の半鐘と特定した。「戦争で本尊1体を残し、すべて焼けた。一つでも戻りうれしい」。坂本圭司住職(60)は、檀家と共に平和への思いを新たにした。

(柏尾 安希子)

半鐘は高さ64センチ、最大径37センチ、重さ約30キログラムで、銅にスズや亜鉛を加えて製造されている。江戸・神田の小沼播磨守が製作し、309年前の正徳元(1711)年12月、檀家らが同寺に寄進した。

表面に刻まれた銘文には「武州橋樹郡河崎領」(現在の川崎市)との文字が確認できるが、寺の名などはやすりのようなもので消されている。「供出に抵抗感があった寺や檀家が消したと予想できる」と市教委の担当者。裏側の表面には菓皮で「30kg」と書かれ、上部には穴も開き、供出後は「ただの金属」として扱われたことが推察できる。

発見は昨夏にさかのぼる。静岡県富士市の鉄工所が廃業に伴い所有物を整理

半鐘、75年経て里帰り

金属供出、「もう一度と」

していたところ、先代が収集していた数個の供出半鐘を見つけた。厚木市の地名が刻まれたものがあつたことから同市の担当者が調査し、川崎の名が残る半鐘を

平和つなぐ

見つけたという。厚木市から連絡を受けた川崎市教委は半鐘を市内に運び、解読を進めた。光量や陰影などを変えながら断片的に残る銘文のデジタル撮影を重ね、「光明山遍照寺」との文字を特定。市教委の服部隆博文化財課長は「分かった瞬間は『やった』と思った」とほほえむ。

半鐘は江戸時代を中心に製作されたが、多くが戦時中に供出されたほか、空襲で焼けるなどして戦前のも

たのか」と驚いた」と振り返った。檀家総代の岩瀬憲一さん(83)は「檀家として、供出は悔しかったろうと思う。そついつことを二度としないですむ平和な世の大切さを、半鐘は若い人に伝え続けてくれるだろう」と話した。

半鐘は来年2月以降、川崎市役所第3庁舎ロビー(川崎区)や市平和館(中原区)で一般公開を予定している。



◆金属類回収令 戦時中の1941年、砲弾などの武器の材料となる鉄や銅といった金属が不足したため、政府が公布した。家庭のなべや銅像のほか、寺院の釣り鐘や仏像なども自発を装いつつ強制的に供出された。川崎市内では42年に供出が実施された記録が残る。

●本堂に置かれた半鐘の横でお経を唱える坂本住職
●半鐘に「武州橋樹郡河崎領」と刻まれた銘文
●8日、川崎市川崎区の光明山遍照寺

川崎区・幸区

寺社巡礼

その3
光明山遍照寺

寛永寺（東京都台東区）をしまい、造られた詳細な年
創建した天海大僧正の弟 代などを特定できずにい
子、高海が開基とされる。 専門家の調べでは室町
その関係から、寛永寺の直 時代に造られたとされてい
末で、東海三十三観音霊場 する。

03番に指定されている。 同寺院は月1回、檀家や

同寺院23代目の坂本圭司 信徒、その縁者らが参加し、
住職によると、第二次世界 お経の読誦会を行っている。

大戦の空襲に遭い、ほとん 秋には読誦会メンバーで大
どの建造物が焼失。大戦前 型バスを貸し切り、2泊3
の物で現存するのは、本堂 日の行程で比叡山延暦寺を

のご本尊「阿弥陀如来立像」 参拝。初日に参拝法要後
のみだという。 宿坊に泊まり、2日目以降

「先代の住職がせめてご は観光するなど慰労会を開
本尊様だけは守ろうと、毛 いている。比叡山延暦寺へ
布にくるみ、境内にあった の参拝は32年間欠かさず行
井戸に沈めた。そのおかげ われ、遍照寺の一大行事と
で、焼失しなかった」と坂 なっている。

本住職。だが、阿弥陀如来 このほかにも、同寺院で
立像の内部に納められてい は4月初旬の土曜日に「花
た、ご本尊の由来を記した 祭り」を開催。毎年、読誦
巻物が水によって固着して 会メンバーや近隣住民ら約
50人が参加している。



戦火を逃れた阿弥陀如来立像

■光明山遍照寺（川崎区中
島2の12の10 ☎044・
244・0661）



戦後復元された本堂